浪人生激減時代の新地図

小さいから実力つく「名塾」

東京では中高一貫校の生徒に小さな塾が人気だ。レベルの高い授業に家庭的な雰囲気。この結果、有名大に現役で合格していく。

フリーライター　小田公美子

靴下でカーペット敷きの床にじかに座り、古びた座敷机に制服姿の生徒たちが肩寄せ合っている。

中高一貫校の生徒が多く集まるアイ・エイ・プレップスクール平岡（東京都渋谷区）。知る人ぞ知る老舗の英語塾だ。

「開講以来、寺子屋スタイルは変わっていません。受験英語ではなく、社会に出てから、大学院などへ進学してからも使える英語の学習を目指しています。ですから通塾生が偏差値の高い大学に多数合格しているのは、結果としてそうなっているだけなんです」（同塾の大町慎浩代表）

人に迷惑をかけない限り、教室では何をやってもOK。講義の合間に軽食を取りつつ周囲の塾生同士で歓談する。

「ほかの予備校や塾だと、隣に誰が座っているかも分からないままただ黙々と勉強しているけど、ここだと近くに座った他校のコとも友達になれるし、親しくなれる」（都内国立中高一貫校の高2生）

「私は海外からの帰国生。中学入学直後、学校の英語の授業に〝こりゃダメだ〟と危機感を抱いた。平岡に通い始めてからは文法は強化できたなという感じ」（都内私立中高一貫女子校の高2生）

生徒集めのための大々的なPRはしていない。中高一貫校の入試日や合格発表の日に各校正門前でパンフレットを配布する。

TOEIC950点も

「昔、親が通っていて良かったから入った」という生徒もいるが、「小学生の頃通っていた塾の友人から聞いた」「学校の先輩から聞いた」という生徒が多い。

通って来るのは首都圏にある著名国立・私立の中高一貫校の生徒ばかり。昨春の東大受験者は132人。うち合格者111人。

1965年に世田谷区で東大受験専用の英語塾「平岡塾」として始まった。現在は中学生から高校生まで約1500人の生徒が通うが、数万人が通う大手予備校と比べると小規模塾である。

授業のレベルは高い。高2の長文読解は、午後5時から午後10時まで休憩をはさみながら5時間かけて『Bertrand Russell On Culture And Politics』を読み進む。これが一コマだ。文法では英語圏の文法の授業でよく使われるという『COMMON ERRORS』をテキストに、正誤問題を解いていく。

「卒業生は大学入試直後のTOEICで900点を超える者が多い。950点を取る者もいる」（大町代表）

英語を学ぶ場としてだけでなく、生徒たちにとって貴重な情報交換の場でもある。単なる塾ではなく、6年間も通う「放課後学校」のような存在だ。

やはり中高一貫校生に知名度が高いのがSEG（新宿区）。80年に東大数学科の大学生、大学院生有志が自分の専門を生かした「大学入学後にも役立つ教育をする場」の設立を呼びかけたのが始まりだ。

ハイレベルな数学の講義内容に定評があり、特に理系学部進学志望者によく知られている。桜蔭出身の女優菊川怜、女子学院出身のNHKアナウンサーの膳場貴子もここに通っていたという。

SEG代表・古川昭夫氏は、「大学院進学後や社会に出てからも自発的に考えることができるような教え方をしている」と話す。今年の東大合格者は理科Ⅲ類11人を含む220人。

こうした、主に中高一貫校の生徒を集め、小規模でハイレベルな授業をする「塾」が人気だ。

通信添削「Z会」で知られる増進会出版社（静岡県長泉町）でも中高一貫校を意識した教室を展開する。74年に東大合格者過半数を会員が占めて以来東大志望者におなじみのZ会だが、

「書かせることを重視するのは、大学入試本番ではあくまで自分で書いて表現するしかないからです。書いて、表現できるだけの理解をすることこそが重要です」（Z会）

進度は中高一貫校に合わせてはいるが、極端に速めてはいない。これは中学段階で過度に急ぎ足で進めても高校になると成長が止まったり、抜け落ちたりしてしまう生徒がいるからだと話す。

アイ・エイ・プレップスクール平岡。英語の長文読解の授業。大町代表の解説を聞く生徒たち

大手予備校も参入する

月刊誌「大学への数学」（公称8万部）執筆陣が講義する教室も人気だ。「大数ゼミ」と名付けられたこの教室を開く東京出版教育ラボ（渋谷区）では昨春、中1から受講できる講座を新設した。月刊誌「中学への算数」誌面で告知する新中1向け春期講習が好評だったからだ。

「人気の新中1向け春期講座は、4日間で中学数学範囲の5～6割を学ぶ。98年開始時は6日間で7～8割を終わらせていた。中学生向け通常講座増設は生徒からの要望によるものですが、我々の役割は、あくまで自分で勉強できるきっかけを作ってあげることです」（事務局・安田博臣氏）

執筆陣が直接教えるためあまり規模は拡大できないが、設置講座数や生徒数は高校生向けに開講した18年前よりも増えた。

小規模塾人気の理由を教育専門サイト「インターエデュ」を運営するインターエデュ・ドットコム（新宿区）森山敏久副社長は、こう話す。

「まずは生徒間の情報収集がITの普及で、数学なら○塾××先生、英語なら――とメールやネットの掲示板で細かくすぐに情報が行き交う。次に大教室でのマスプロ的授業では生徒や親が満足できなくなってしまったことがあげられます。勉強は本来、100人いれば100通りのカリキュラムがあるのです」

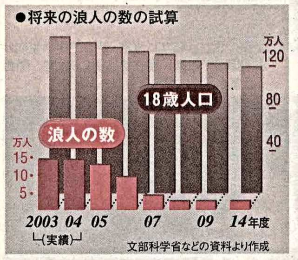
『間違いだらけの中高一貫校選び』の著者で精神科医の和田秀樹氏は、こう指摘する。

「小規模塾人気はより自分に合った塾に通いたい、よりオーダーメードに近い塾を使いたいという需要に合っているのだと思う。上位校生徒も中高一貫校入学後すぐから塾に通う。また、いくら難関の中高一貫校に入っても、学校の勉強だけでは東大入試突破は難しいと感じる生徒が多いのです」

こうした傾向に、大学入試の全国模試を実施するような大手予備校が目をつけた。

河合塾は97年「MEPLO」「K会」の中高現役生向け少人数講座を開いた。

「「MEPLO」はいわばSEGみたいなもので中高一貫校の進度を考慮したコース。『K会』は中高一貫生は多いが大学受験ばかりを意識したものではなく、数学オリンピック入賞者などが〝本当は中高生の頃こんな数学をやりたかった〟といった授業を行う。東京では6割が中高一貫校であることを考えると、一貫校生のためのプログラムを用意することが必要と考えた」（河合塾・片山睦雄氏）



浪人生激減時代の備え

現役生向けコースは従来から用意しているが、受験向けの大量の情報処理ばかりに頭を使うのではない学びの場を設けたかったという。K会には数学オリンピック上位に残るような生徒、米国ハーバード大やプリンストン大に進学しているOBもいる。

全国6万人を擁する代々木ゼミナール（渋谷区）は、中学生向けの講座はないが、中高一貫校生向けには高校「中高一貫東大コース」「中高一貫国公立医学部コース」を設ける。

高3生と既卒生とを合わせた「大学受験生」で全国で約3万人の規模がある駿台予備学校（千代田区）では高校生向け「現役フロンティア」コース、中学生向け「現役フロンティアジュニア」コースの中にそれぞれ中高一貫校生向け講座を設けている。

衛星放送授業で人気の東進ハイ

photo　今　祥雄